

# 手話解説 DVD 教材「ごんぎつね」を用いた教科指導の取り組み

茶園浩志（熊本県立熊本聾学校）

## 1. 手話解説 DVD 教材の作成

熊本県立熊本聾学校では従来、日本語の獲得を阻害するとして手話を積極的に用いてこなかった。しかし平成 15 年度から検討を始め平成 16 年度にはコミュニケーション手段として手話・指文字を位置づけた。そして現在は熊本県の事業である「くまもと育改革支援事業」の一環として「くまろう手話力向上プロジェクト」を展開しているところである。この「くまろう手話力向上プロジェクト」は平成 16、17、18 年度の三年間の予定であり、現在はその二年目に当たる。このプロジェクトは 1) 職員の手話コミュニケーション力向上、2) 手話 DVD 教材の制作、そして 3) 言語環境の整備の三つの柱からなる。ここでは 2) 手話 DVD 教材の制作を中心に述べていく。

手話 DVD 制作の目的は手話を導入したあとの授業等の活動における必要性からだった。聴覚障害教育に手話が導入され始めたが、手話に堪能な教師が少ないことに加えて、手話を活用した教科教材がほとんどないのが現状であった。そこで手話教材制作に実績を持つ聴覚障害者情報提供センターやその他関係者とプロジェクトを組み、小学校国語教科書の一単元を採り上げ、手話を活用した国語補助教材のプロトタイプ版（試作品）を制作する試みを開始した。DVD 制作プロジェクト委員は熊本県立熊本聾学校、難聴幼児通園施設、熊本大学留学生センター、株式会社エヌ・アイ・ケイ、熊本県ろう者福祉協会、熊本県聴覚障害者情報提供センターから集まった。平成 16 年度は委員会を 10 回、小委員会を 4 回開催し、その中で以下のような内容を話し合った。

- 第 1 回（5/17）・聾学校教育の現状の確認と手話教材の必要性
- 第 2 回（6/8）・九州の聾学校で手話教材に望まれているもの・教材・単元
- 第 3 回（7/13）・「ごんぎつね」手話版ビデオ（仮）の視聴と手話表現
- 第 4 回（8/6）・ビデオ（仮）についての熊本聾学校生徒の反応
- 第 5 回（9/14）・著作権の処理、画面構成
- 第 6 回（10/12）・選択語句　　・手話表現方法の確認
- 第 7 回（11/16）・画面構成・選択語句の最終確認・ナレーション
- 第 8 回（1/11）・試作品の鑑賞と点検、変更部分
- 第 9 回（3/8）　・変更部分の確認、再変更（文と手話のリンク方法）
- 第 10 回（4/12）・試作品の利用方法　　・アンケート

さらに試作された DVD を用いて公開授業研究会を平成 16 年度に一回、平成 17 年度に一回の計二回開催した。現在は試作版を他の学校にも配布し、試用の感想を集めながらよりよい内容に改訂する作業を進めている。

## 2. 手話解説 CD-ROM 教材を用いた授業

平成 18 年 2 月 9 日に行われた授業研究会を振り返ってみる。

授業者は小学部四年の担任で、本時の目標を「場面の状況を想像しながら兵十とごんの気持ちを読み取ることができる」として授業が展開された。授業者としては手話 DVD の読み取りにはいつも手話表現と、聾者の表情に注目しているとのべた。児童の様子につ

いては、手話表現がないときと比べると子どもたちはスムーズに教材に入り込んでいて、意見もたくさんでたとのべた。また授業の反省としては時間配分と表情の読み取りにこだわりすぎた点を上げた。

参加者からは様々な質問や意見が出された。

DVD の家庭での自習時の活用について質問が出た。

授業者からは家庭でも使用できるような体制をとっており、はじめは日本語に対応する手話表現を確認すること、次には積極的にまねてみることなどを指示しているとのこと。また家庭では保護者が学習を支援し、寮生活の児童の場合にはより高学年の児童が支援している状況を報告した。

同じ視覚教材でも映像のみのビデオ教材を用いて解説する場合と手話の解説による教材を用いる場合の違いについて意見があり、より言語性の高い手話教材の特徴を感じたとのことであった。このことに関連して手話での解説の場合にはいくつかの解釈の可能性のあるものから特定の表現を選ぶことになるので、その選択に関しての質問があった。

会場からは教材制作委員会の代表者が、全体での討議を経て表現を決定するとの回答があり、手話表現担当者の判断ではないことが述べられた。この後日本語のいくつかの特定の語についてその手話表現の適切性が議論された。

授業者からは再度授業の進め方や DVD の使用方法について補足説明がされた。基本的にはテキストの音読を行い、次に手話を読む手話読を行う。その後読解に移っていく。音読と手話読とどちらを先にするかについても場合による。日本語のテキストの読解ということでは、手話は助けになっているが、それだけで日本語が読めるわけではない。日本語の読み取りについてはこの後の時間で深めていく、という内容であった。

この後参加者の中でこの試作 DVD の使用体験を持つ先生や他の手話ビデオ教材を用いた経験を持つ先生の発言を求め、授業の順序や課題などについて討議が進んだ。

最後に助言者から授業と DVD についてまとめの発言があった。

まず教師と生徒の間に信頼関係をもとにするよい関係があったこと、子どもたちが積極的に授業に参加していたことが述べられた。その一方児童同士の会話や児童からの意見の引き出しが全体には少なかったことが指摘された。また日本語と手話の対応付けが、単語のレベル中心であったが、文同士の対応付けや文法事項の表現の対応付けも可能である旨が述べられた。

DVD については、今回の場合、オリジナルの「ごんぎつね」テキストに対する手話翻訳という表現の一例であることが述べられた。従って本 DVD の解釈を巡って様々な解釈について議論することもありうること、DVD が国語を好きになるきっかけになることが期待されることなどが述べられた。

子どもたちがそれぞれの良さを大切にしながら国の味わいや手話の味わいを楽しめるように学習していくことを期待するとのことでもとめられた。